

協働活動に埋め込まれた現場指示の「これ」と「それ」の用法 ～北信州野沢温泉に伝わる道祖神祭りの準備作業場面より～ The usage of the spatial-temporal deixis “KORE” and “SORE” embeded in collaborative activities: Case studies of the preparing works for Dosojn festival in Nozawa-Onsen

榎本 美香[†], 高梨 克也[‡]
Mika Enomoto, Katsuya Takanashi

[†] 東京工科大学大学メディア学部, [‡] 京都大学大学院 情報学研究科
School of Media Science, Tokyo University of Technology, Graduate School of Informatics, Kyoto University
menomoto@stf.teu.ac.jp

Abstract

In this paper, we investigate how the spatial-temporal deixis “KORE” and “SORE” are used in real collaborative activities. We analyze interactional data obtained from 6-year recordings in which participants prepare for Dosojn festival in Kita Sinsyu Nozawa-onsen. We found following 3 types of usages. (1) If a speaker and hearers are participate in a common activity, the speaker refer to an object with “KORE”. (2) If a speaker and hearers are participate in different activities, the speaker refer an object near the hearers with “SORE”. (3) If there are multiple objects in their common activity, the speaker refer an object depending on the relative distance from oneself and hearers to the object, respectively.

Keywords — spatial-temporal deixis, common activities, relative distance, interactional situation

1. はじめに

本研究の目的は、指示代名詞である「これ」と「それ」が実際にあるものを指すために産出されるとき、どのようなジェスチャーが伴い、聞き手と対象物とがどういった身体的位置関係がおかれ、どのような発話構成が取られるかを分析することである。

一般的な文法研究(高橋, 2005)では、「これ」「それ」といった指示代名詞は、直前の発話に出てきたものを指す文脈的な用法と会話の場にあるものを指す直接的な用法があるとされている。本研究で対象とするのは後者の直接的な用法である。コソアは、近称、中称、遠称の3つに分かれる。そして、話し手と聞き手が近接しているなら、「われわれ」という領域を作り、その領域内にあるものをコ系で表し、領域外の比較的近い方をソ系、それより遠い方をア系で表す(図1)。話し手と

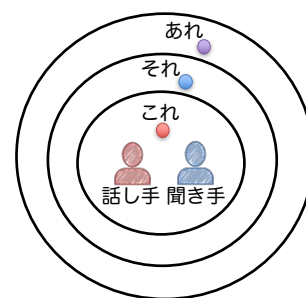


図1 近接している場合

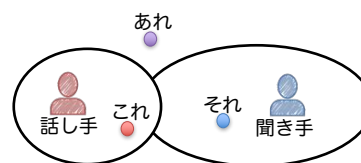


図2 離れている場合

聞き手が離れている場合、話し手の領域をコ系、聞き手の領域をソ系、その外をア系で表すとされる(図2)。佐久間(1992)はこの話し手の領域を「わ」(我)のなわばり、聞き手の領域を「な」(汝)のなわばりとし、人称代名詞と指示代名詞の対応があるとしている。しかし領域であれなわばりであれ抽象的な概念であり、その線引きは不明確である。

ラオ族の自発的会話を分析するEnfield(2003)は、特定の目的のための特定の瞬間に‘here’といえる場所をHERE-SPACEと名付けている。この時に使われるのが近称(nii)である。これは話し手が従事する場所で、現在の主たる操作や注意が向けられている領域であり、相互作用につれて随時変化する(Enfield(2003):89)。ラオ語でnan(遠称)は、参照物がHERE-SPACEに無いときに用いられる。図3のように図示でき(Enfieldの図を著者が改変したもの)、(a)は岸辺での会話で川中のボートにいる子供たち、(b)は屋台の売り台の端にある商品、(c)は右端は売り台の聞き手側にある商品を参照

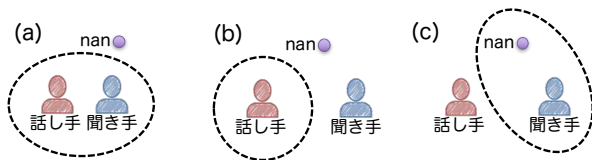


図3 nanが使われる場合

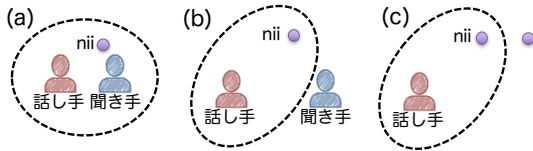


図4 niiが使われる場合

したものである。nii(近称)は図4のように図示でき、(a)は円座の親子の真ん中にある玩具、(b)は屋台の売り台の話し手側にある商品、(c)は手前のタオルが参照物である。これらの図を一望すると、話し手のHERE-SPACE外に参照物があればnan, HERE-SPACE内であればniiが用いられるようである¹。

一方、指示詞の基本的な機能は、どこに何かがあるのかを特定することではなく、どれについて話しているのかを特定することであるという議論もある(Fillmore, 1982)。Levinson (2004)は、指示詞のもっとも重要な機能は、話し手を中心とした空間定位ではなく、聞き手との共同注視(joint attention)を確立する機能であるとする。平田(2016)は、指示詞の接尾辞「ーレ」「ーコ」「ーッチ」である質的素性に着目し、まず聞き手の注意を「ーコ」「ーチャ」によって対象が含まれる空間へ誘導し、次に「ーノ」「ーウ」と自らのジェスチャーに注意を向けさせることで対象を特定させた上で、聞き手の注意が意図する対象に到達したと話し手が解釈したときに、「ーレ」が選択されることを観光案内場面の事例から示している。

聞き手側からみると、話し手が指示詞で指し示す対象を特定するためには、「これ」や「それ」の語彙的な意味を理解するだけでは不十分である。Levinson (2004)はこれを、指示詞の意味が言外の情報で補うべきスロットを持つとし「明白な意味的欠乏性(obvious semantic deficiency)」と呼んでいる。欠乏した意味を補うには、指差しなどのジェスチャーや話し手と自身と対象物との身体的位置関係を参照しなければならない。また、空間的位置関係だけでなく、活動参加者たちがたずさわる協働活動を達成する相互行為的文脈も参照しな

¹Enfield (2003)は、niiはnanほど空間的制約がなく、特定のHERE-SPACEが無い時に利用可能でもとしている。例えば、周囲の家の前に立っている人たちに大音量で話している婦人が遠くを通る牛を指差してniiと言う。

ればならないだろう。本研究では、北信州野沢温泉で行われる道祖神祭りの準備作業場面を対象とし、多種多様な道具を操作する局面において、「これ」と「それ」が実際にどのように産出されるのかを分析する。

2. 分析資料

2.1 収録場所

長野県下高井郡野沢温泉村

2.2 収録対象

野沢温泉で1月15日に行われる道祖神祭りの支度を担う、「三夜講」という数え42歳につらなる3学年の集団の相互作用を収録対象とする。三夜講内では、毎年42歳30名弱の集団が祭りの中心的な執行を担う「世話人」となり、それより年下の集団は「見習い」として世話人を手伝う。また、世話人を終えた年上の集団は主だった行事のみ「後見人」として世話人を補佐する。図6にこの模式図を示す。

例えば、前「三夜講」は2013年度に数え42歳をむかえた寶友会を筆頭に、その時41歳であった成翔会、40歳であった焔心会から編成されていた。2013年度は寶友会が世話人、成翔会・焔心会は見習いとして参加していた。2014年度には、成翔会が世話人となり、焔心会は見習い、寶友会は後見人として参加した。2015年度には、焔心会が世話人となり、寶友会・成翔会は後見人として参加した。また、現「三夜講」の最年長グループである励翔会が引き継ぎのため見習いとして参加した。2016年度は「三夜講」全体が入れ替わり、励翔会が筆頭となり、その下の2学年が新たに加わる。

「三夜講」の3つの集団の代表者2名(道祖神委員長・副委員長)の計6名は保存会として次の「三夜講」の指導にあたる。これに加え、総元締めである野澤組から顧問という役職の者が数名、社殿造営の指導に加わる。顧問以外の保存会は3年毎に入れ替わる。主たる行事には25歳厄年の男性も参加する。

2.3 収録方法

筆者らを含む、最大時総勢9名²が各自デジタルビデオカメラを手持ちで対象を追いながら撮影。同一場面を別アングルから撮影した場合は、最初に手拍子を入れ、収録後その情報から複数映像を時間的に同期した。

²行事の大きさに応じて収録者数を調整している。

表1 道祖神祭りの支度場面の収録内容と既収録時間

行事名	活動内容	時期	既収録時間	既収録年度
シート洗い	ブルーシートの掃除	6月上旬	23時間(4年分)	2014, 2015, 2016, 2017年度
御神体伐採	道祖神木像の伐採	7月中旬	23時間(4年分)	2014, 2015, 2016, 2017年度
ぼや出し	社殿材料の収集	9月下旬	29時間(3年分)	2013, 2014, 2015年度
御神木伐採	社殿材料の木材伐採	10月中旬	298時間(5年分)	2012, 2013, 2014, 2015, 2016年度
御神木里引き	御神木運搬等	1月13日	198時間(5年分)	2012, 2013, 2014, 2015, 2016年度
社殿組み	社殿造営等	1月14日	270時間(5年分)	2012, 2013, 2014, 2015, 2016年度
道祖神祭り	上棟式・祭り	1月15日	223時間(5年分)	2012, 2013, 2014, 2015, 2016年度
シート片付け	道祖神場のブルーシート上げ	4月上旬	11時間(3年分)	2014, 2015, 2016年度

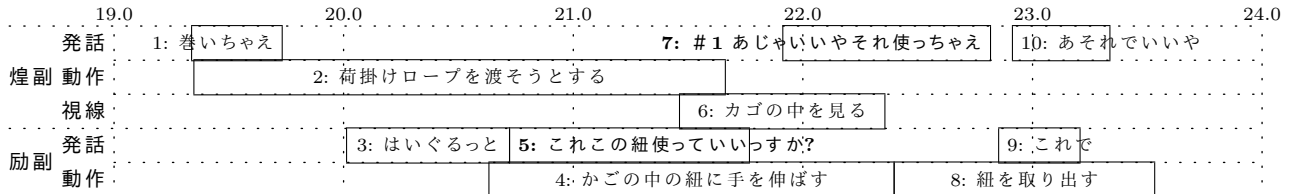


図5 例1:(煌副=煌心会副委員長、励副=励翔会副委員長)

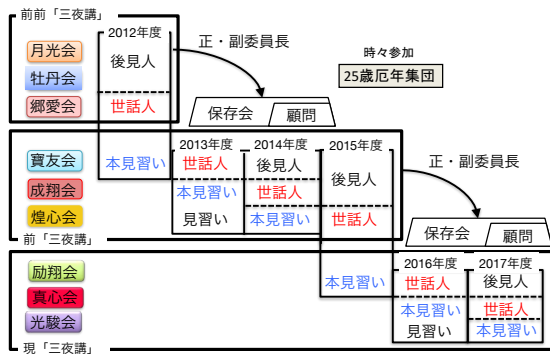


図6 「三夜講」模式図

2.4 分析内容

収録対象である行事名と既収録時間を表1に示す。

3. 分析

3.1 物理的に自分の方が近くても「それ」

まず、参照物との物理的距離でいえば聞き手より話し手の方に近いものを指すのに「それ」が使われる例をみよう。例1(図5, 8)は軽トラの荷台に荷物をくくりつけるシーンである。時は2015年7月12日、煌心会が世話人、励翔会が見習いで、御神体伐採という行事後のシーンである。世話人である煌心会副委員長がトラック向こう側、見習いの励翔会副委員長が手前である(図5)。煌心会副委員長は「1: 巻いちゃえ」と自分が持っていた荷掛けロープを励翔会副委員長に渡そうとする。励翔会副委員長の前にある尺棒に巻き付けろという意味である。励翔会委員長は「3: はいぐるっと」と応答するも、荷台にあるカゴの中に入っている紐

に手を伸ばしながら(4)、「5: これこの紐使っていいですか?」と聞く。その紐で尺棒をくくりつけるということによいかという意味である。このカゴは煌心会副委員長側にある。煌心会副委員長はカゴの中を見て(6)、「7:あじゃいいやそれ使っちゃえ」と言う。励翔会副委員長はカゴの中から紐を取り出ししながら(8)、「9: これで」というと、煌心会副委員長も「10: あそれでいいや」という。

この例では、参照物であるカゴの中の紐は物理的距離でいえば、煌心会副委員長に近い。しかし一貫して、煌心会副委員長はその紐を「それ」で指し、励翔会委員長は「これ」で指している。このことは「これ」と「それ」の使い分け単純な物理的距離に依拠しているわけでないことを示す。

3.2 違う対象に働きかけているなら「これ」と「それ」

例1で、煌心会副委員長はなぜ「それ」で参照物を指したのだろうか。Enfield (2003)がいうHERE-SPACEという観点からみてみよう。話し手が主たる操作や注意を向けている場所である。例1では、煌心会副委員長は荷掛けロープを荷台に掛けるという作業に従事している。このロープではなく、カゴの中に入っている紐を使って励翔会副委員長が尺棒をくくりつけることを申し出すことで(図5:5)、それぞれが別々の作業に従事することになる(図8中破線で囲んでいる)。つまり、煌心会副委員長は荷掛けロープを手でそれを荷台にかける作業、励翔会副委員長はカゴから取り出した紐を使って尺棒を固定する作業に従事する。すなわち、煌心会副委員長からみれば、励翔会副委員長がもつ紐は図3(c)の状態にある。これが「それ」が使

	118.0	119.0	120.0	121.0	122.0	123.0	124.0	125.0
社棟 発話:	1: #1 ちょっとこれこれ縄は押さえちゃいげねえんだど							
社棟 動作:	2: 縄を引っ張る				3: 豆がらを押す			

図7 例2(社棟=社殿棟梁)



図8 例1異なる作業への「それ」(#1話し手: 焔心会副委員長, 聞き手: 励翔会副委員長)



図9 例2共同作業対象への「これ」(#1話し手: 社殿棟梁, 聞き手: 周囲の三夜講メンバー)

用された理由だと考えられる。

3.3 同じ対象に働きかけているなら「これ」

では、話し手と聞き手が同じ操作や対象に注意を向けている作業における指示詞の用例をみてみよう。例2(図7, 9)は社殿造営の一部で、5本のうち中央の御神木に「豆がら」と呼ばれる枝豆の枝の束を縄で縛り付けている場面である。時は2016年1月14日、世話人焔心会のもと、社殿の足元の造営が行われている。図9右手の傘(「焔」の字が見えている)を被った男性が社殿棟梁であり、社殿造営の総指揮者をとる。この作業は周囲から豆がらを柱に押し付ける者たち4,5人とその周囲に巻いた縄を左右に締めあげる者2人の共同作業によっ

て行われる。「せーの」「よいしょ」の掛け声で、前者は豆がらを柱に押し付けて体積を小さくし、後者は縄を互い違いに引張り豆がらを締め付ける。この場面は一度そうした作業が行われ仕切り直しで休止に入ったところである。

社殿棟梁が大きな声で「1: ちょっとこれ」と言い出しながら目の前の縄を自分の方へ引っ張り、「これ縄は押さえちゃいげねえんだど」と言う。そして自分の前の豆がらを押す動作をする(3)。ここでいう「これ」は「この作業は」というぐらいの意味であろう。それぞれの人にとって押さえるべき「これ」の位置は違うものの、目の前の豆がらを押さえるという点においては全員同じである。木の周囲を取り囲んだ全員のHERE-SPACEが中央にある豆がらであり、全員にとってそれは「これ」なのである。図4でいえば(a)の状態である。

3.4 今の対象から異なる対象へ聞き手の注意のひきはがし

次に、ある同一の対象に働きかけている状態から他の対象へ注意の焦点をずらすために、使われる「これ」と「それ」をみてみよう。例3(図10)は、祭りに関わる道具が格納されている倉庫の中で、道具の整理のため一部のものを外へ運び出している場面である。時は2015年6月7日、焔心会が世話人、励翔会が見習いになって最初の行事である。焔心会の道具係が荷物を棚から下ろし、道具長がそれを外へ運び出す。ロープの入ったカゴが降ろされ(1)、道具長がそれを床に置くと(2)、道具係が「こんで(.)マニラ終わり」(3)と言い、道具長も「終わり」(4)、「オッケー」(5)と了解する。ここで、道具係は「上のマニラ(.)あ」(6)と言いながら、自分の左手上方にあるカゴに視線を送る。図11の奥側で棚に取り付いているのが道具係、手前にいるのが道具長であり、二人は棚に対して同じ方向に並行して立っている。道具係がカゴへ視線を送ると(7)、道具長もそちらへ視線を向け(10)、「これ違う道具だからいい」(9)と言う。この瞬間の写真が図11である。二人は「これ」で指示された対象物に共同注視を注いでおり、それを取り出すかどうかという共同作業に従事している。すなわち、同じHERE-SPACEに居るので、直接カゴに触るなどの操作をするには少し距離の遠すぎる道具長も「こ

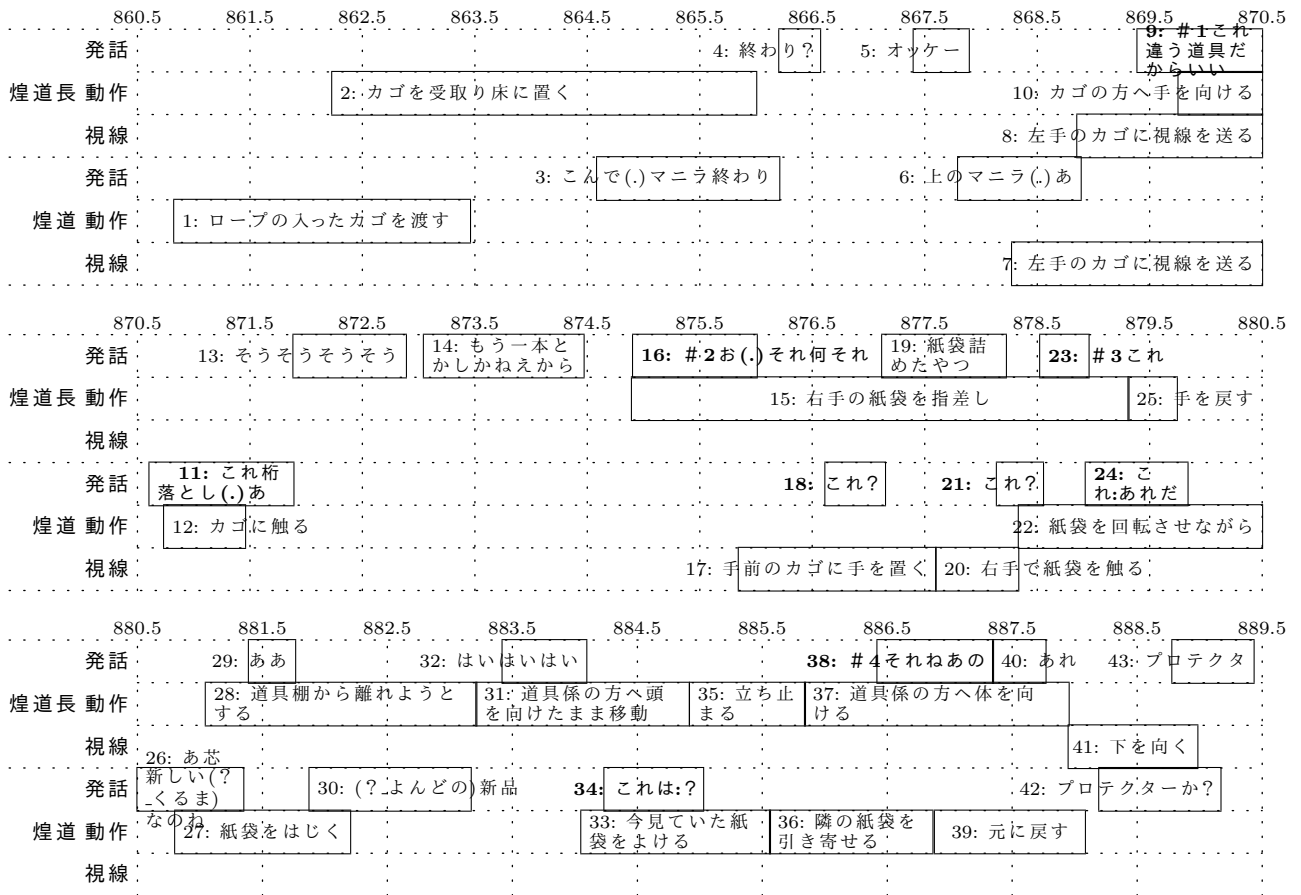


図 10 例3 (焔道長 = 焔心会道具長、焔道 = 焔心会道具係)



図 11 例3 共同注視の対象への「これ」(#1 話し手: 焔心会道具長, 聞き手: 焔心会道具係)



図 12 例3 聞き手の注視を移動させる「それ」(#2 話し手: 焔心会道具長, 聞き手: 焔心会道具係)

れ」という指示詞が使用できたと考えられる。あるいは、道具係が荷を下ろし道具長がそれを受け取るという一連の行動を1セットと考えて、道具係の手がかかる範囲というのは自身の操作の一環と捉えられるため、「これ」という指示詞が使用可能なかもしれない。道具係も「これ桁落とし(.)あ」(11)と「これ」で受けている。

このやりとりが終わると、道具長は道具係の右

手付近の棚に乗っている紙袋を指差し(15)、「お(.)それ何それ」(16)と言う。この時の写真が図12である。道具長の注意は紙袋に移っており、話し手である道具長自身は紙袋を含む空間に作業の場を移している。およそ図12中の破線で示した範囲であろう。しかし、聞き手である道具係は棚から降りようとしていて、まだ直前の会話時の注意状態にいる(図12中実線で示す)。今聞き手が注意を向



図13 例3 聞き手の注視移動後は「これ」(#3 話し手: 焔心会道具長, 聞き手: 焔心会道具係)



図14 例3 話し手がその活動から離れると「それ」(#4 話し手: 焔心会道具長, 聞き手: 焔心会道具係)

けている空間の外にあることを示すために、あえて「それ」という指示詞が使われたと考える。道具係が「これ?」(18)と先程まで注意を向けていた空間の右外にあたる位置にあったカゴに触ると、「紙袋詰めたやつ」(19)と対象を識別するための指示詞ではない名詞が選ばれ、道具係が「これ?」(21)と対象を探り当てると、道具長も「これ」(23)と承認する(図13)。ここで自分と聞き手の注意の対象と作業の対象が一致し、同じHERE-SPACEに両者が入ったと考えられる。そのときには、先ほど「それ」と言われた同じ距離にある対象が「これ」になるのである。

その紙袋の中身が「新しい(?_くるま)なのね」(26)「(?_よんどの)新品」(30)³であることが分かると、道具長は次の作業へ向かうため棚から離れようとする(28)。その姿勢で頭だけ道具係へむ

³音声 が 明瞭 に 聞き 取れ ず 何 と 言っ て いる の か 定 か で は な い。また 聞き 取れ た と し て も、その 単語 に よっ て 何 が 指 さ れ て いる の か 著 者 ら に は 分 か ら な い。し か し、当 事 者 た ち の 間 で は す ぐ に 了 解 さ れ て いる。

けて「はいはい」(32)と返答がなされる。これは Schegloff (1998)のいう「身体ねじり(Body torque)」の状態である。複数の活動に同時に関与するときの典型的な姿勢であり、安定性の高い下半身は関わりが強い支配的関与の活動へ、一時的に動かせる上半身は関わりが弱い従属的関与の活動へ向けられている。ここで道具係から「これは?」(34)と問われ、下半身も道具係へ振り返ってはいるが、既にすこし離れていた位置から「それねあの」(38)と答えている(図14)。この時、道具長は道具係と共同行為で行っていた道具の運び出しという作業からすでに離れていて、道具係が手をかけている対象物もその範疇から外れたものであることを示しているようにみえる。

3.5 働きかける対象が複数あるなら相対的に「これ」と「それ」

参照対象が複数同じ共同作業の中にあるとき、自身からの相対的距離に応じて「コレ」「ソレ」が使われられる。

例4(図16)は道祖神像となる木に対して、どの位置を顔にするかを決めている場面である。時は2015年7月12日、焔心会が世話人であり、朝から伐採をしてきた木を開けた場所まで持ってきてこれから皮むきをする。伐採や道祖神像に関しては副委員長が差配の権限をもつ。図17で、木の正面奥にいるのが焔心会副委員長、木の手前にしゃがんでいるのが焔心会委員長である。副委員長は「そこ顔書きやすいけどな」(1)と言いながら、委員長寄りの木の部分を指差しす(2)。委員長は「うんここら辺な」(3)と、その指さされた辺りに手で円を書く(4)。彼らは顔の位置決めという同じ活動に従事しているわけだが、委員長側のある位置が「そこ」として指示されている。木の上部の円周上であればどこでも顔がかけるわけだが、今そのうちの一箇所が指されている。続いて、委員長は木の上にある節を指差しながら(6)、「これ削り大丈夫」と聞く。委員長からは手の届く位置であり自身に近いので、「これ」が使われたのであろう。副委員長「それうん」(8)と受けて、「落として」(9)と言う。参照物となりうる複数の節のうち、委員長側にある「それ」ということになるのだろう。

Enfieldは図4の(c)のように、複数の参照対象のうち、話し手のHERE-SPACEに入っているものをniiとしているが、HERE-SPACEにも複数の参照対象がある場合も当然ある。その場合、事例4のように、聞き手の方により近いものを「それ」、話し手により近いものを「これ」として表現されると考えられる。

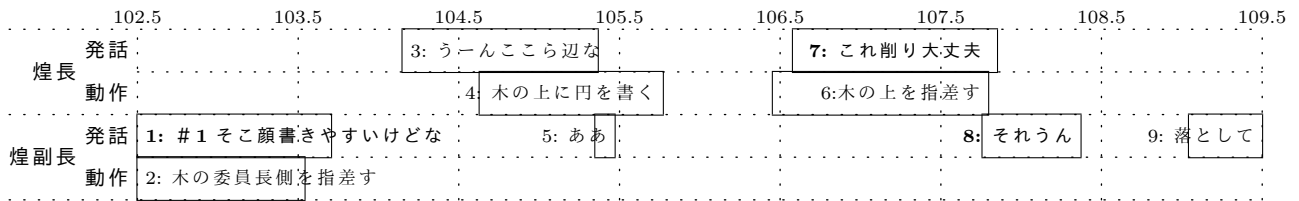


図 15 例4 (焔長=焔心会委員長、焔副長=焔心会副委員長)

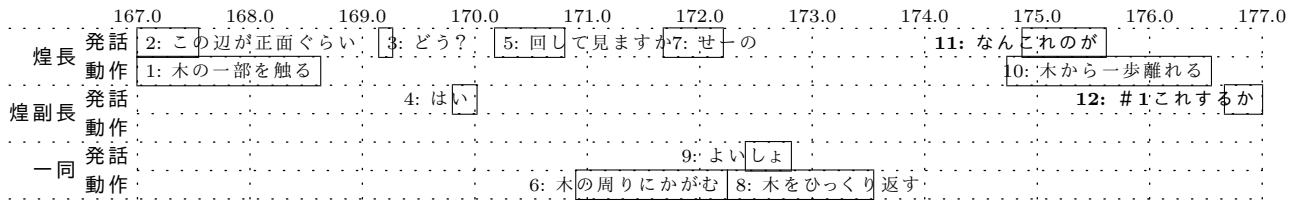


図 16 例5 (焔長=焔心会委員長、焔副長=焔心会副委員長)

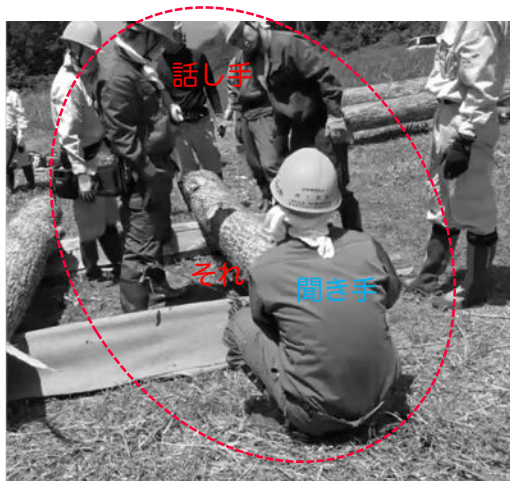


図 17 例4 複数の参照点のうちの「それ」(#1 話し手: 焔心会副委員長, 聞き手: 焔心会委員長)



図 18 例5 現在の状態は「これ」(#1 話し手: 焔心会副委員長, 聞き手: 焔心会委員長)

例5(図16)は例4の少し後である。道祖神像の顔の位置を考慮しながら、像の正面となる木の向きを決めている。委員長が「この辺が正面ぐらい」(2)、「どう?」(3)と言うと、副委員長が「はい」(4)という。暫定的に正面が決まる。そしてその正面の上に皆で木を回転させる(6,7,8,9)。ここで委員長が木から一步離れる(10)。近くにかがんで顔の位置に焦点を充てていた状態から、一步引いて木の全体像を見ようとしている。そして、「なんこれのが」(11)と言うと、副委員長も「これにするか」(12)と言う。委員長や副委員長の位置は木に対して例4と同じである。しかし、「これ」に対比されている対象が、別の方向の木の向きであり、いま現状皆がみているのは「これ」が上向きになった状態である。この場合の複数の参照対象は遠い近いという対比ではなく、この向きとそれ以外の向きという対比になるので、この向きは誰にとっても「これ」となる。

複数の参照物がある場においていずれかを指すのではなく、過去の状態、現在の状態、あり得る未来の状態として時間軸上で対比される存在である場合の指示詞の用法はこれまで指摘されてこなかった。例5から、さっきの状態に対比される今の状態には「これ」という指示詞が使われることが明らかになった。

4. 議論

話し手と聞き手が共同行為に従事している否かというEnfieldの視点は、「これ」と「それ」の使い分けにおいても鍵概念になることが本分析を通じてわかった。Enfieldは話し手のHERE-SPACEか否かが遠称になるか否かを決めるとしていたが、本研究ではこれをさらに明確化し、話し手と聞き手

が同じ対象に働きかける行為をしているなら「これ」(例2, 例3#1,3)、異なる活動に働きかける行為をしているなら、聞き手の方の対象物を参照するときには「それ」(例1, 例3#4)を使うということを示した。また、これまで働きかけてきた対象の外へ注意をむけるために「それ」(例3#2)を用いて「注意のひきはがし」が行えるというまさに現場における語用のあり方を分析した。さらに、Enfieldが指摘していなかったが、共同行為中に複数の参照物がある場合、話し手と聞き手との相対的な距離によって「それ」や「これ」が使われること(例4)、現在の状態を指すときには「これ」が使われること(例5)もみた。

これらを対象に対して聞き手との共同注意を確立するという観点から見てみよう。1つしかない同じ対象を操作するという例2のような場合には、話し手にとっての「これ」は聞き手にとっての「これ」でもある。大した労力をかけなくても、「これ」を特定することができる。自身が注意しているものは他者も注意していることが明白である。一方、話し手と聞き手が別々の活動に従事しており、それぞれ別の操作対象をもっている例1や例3の#4のような状態のときには、話し手が「これ」で導入した対象を、自身の作業の手を止めて見る必要がある。こういった場合には、話し手もその対象に手で触れるということをしている。「これ」と言われて聞き手が話し手を見たなら、話し手の身体が対象の在り処を示してくれているのである。そこへ視線を向ければ共同注視が確立できる。同様のことは、ある活動から別の活動へ移行する際にも生じる。例3#2のように、敢えて「それ」を導入することで、これまでの注意の対象ではない対象へ聞き手を導く。この例では、話し手が示した指差しジェスチャーを聞き手が見なかったために、具象名で言い直しが生じているが、もし聞き手が少しでも話し手を振り返っていれば、やはりその身体によって対象物が特定されていたのである。

さて、同じ共同活動に従事していても対象物が複数ある場合、そのうちの一つを共同注視するのはやややっかいである。例4では、離れたところから話し手が指差しをしているが、まさにそのポイントがどこであるのかを見出すには、発話とあわせて聞き手が推測するしかない。この例では「そこ顔書きやすいけどな」(1)という発話とあわせて考える必要がある。顔になる位置は木の彎曲などが無く、また節もない方がよいという知識に照らして、聞き手は即座に「ここら辺な」(3)を手で示して見せている。また、例5のように対比される対象がさっきの状態(過去)やこれから起こるべき状態(未来)に対して、今日の前の状態(現在)を「こ

れ」として焦点をあわせる。話し手も聞き手も自分たちが携わっている活動の目的に照らして、何と何が対比させられる対象なのかを特定しているということになる。

謝辞 調査にご協力いただいている歴代の野澤組惣代・保存会・三夜講の方々に感謝します。本研究は、科研費基盤(B)「祭りの支度を通じた共同体〈心体知〉の集団学習メカニズムの解明」(2015~2017年度、代表:榎本美香、研究課題番号:15H02715)の補助を受けています。

参考文献

- Enfield, N. J. (2003). Demonstrative in space and interaction: Data from Lao speakers and implications for semantic analysis. *Language*, **79**, 82-117.
- Fillmore, C. J. (1982). Towards a descriptive framework for spatial deixis. In J. J. Robert & K. Wolfgang (Eds.), *Speech, place, and action*, 31-59. Chichester: John Wiley.
- 平田末季 (2016). 共同注意確立過程における話し手による指示詞の質的素性の選択. 『語用論研究』, **18**, 28-47.
- Levinson, S. C. (2004). Deixis. In L. R. Horn & G. L. Ward (Eds.), *The handbook of pragmatics, Brackwell handbooks in linguistics 16*, 97-121. Oxford: Blackwell.
- 佐久間鼎 (1992). 指示の場と指す語—「人代名詞」と「こそあど」. 金水敏・田窪行則(編), 『指示詞』, 32-34. ひつじ書房.
- Schegloff, E. A. (1998). Body torque. *Social Research*, **65**, 535-596.
- 高橋太郎 (2005). 名詞(3) 特殊な名詞. 『日本語の文法』, 51-57. ひつじ書房.